

お世話になりました。27日に帰国します。

とうとう帰国することになってしまいました。配属先は予想外の部署で、いろいろな人から聞く限りにおいては残業のエライ多いところだそうなので、体がすぐ慣れるかどうか心配です。新居（但しこの社宅も古そうなので、いつまでいるかわかりませんが）に落ちつき次第、電話と電子メールアドレスは別途お知らせしたいと思います。（浩司）

【新住所】東京都多摩市関戸2-25-1 ハイマート第3聖蹟桜ヶ丘204号

【勤務先】東京都渋谷区代々木2-1-1 新宿マインズタワー11階 国際協力事業団派遣事業部派遣第2課

Phone: 03-5352-5194 (直通) Fax: 03-5352-5439 (部内)

プーケットは遠かった・・・

最後の悪あがきは大失敗

5月の帰国を前に、4月中旬に最後の任国外旅行でプーケットに行こうと思い、旅行会社に予約をすると、バンコクからプーケットへのフライトが満席で取れないと言われ、リクエストだけしておくことにしました。数日後フライトは押さえられたとの連絡があったので今度はホテルを押さえようとすると、イースター休暇の時期にあたるためどのホテルもバック料金の部屋は満室と言われ予約が取れませんでした。

この時点で出発1週間前、旅行会社に調べてもらおうとバック料金以外でも取れないということだったので、結局旅行を2日前にキャンセルしてしまいました。ここまで予約が出来ないと、まるで神様が行くなと言っているんだねと諦めると、いつも元気だった樹生が風邪をひきました。コックのナヌさんからうつったもので、1晩だけですが39度の熱が出て元気がなく、その後1週間ぐらいい体がだるいのかグズグズして機嫌が悪い日が続きました。

そして樹生が良くなってくと私にうつり、やはり減多に熱を出さない私が38度の熱を出し寝込んでしまいました。この時は本当に辛く、何よりも辛かったのは母乳をあげることでした。熱を出した日は食欲もなく食べなかったので母乳が不足気味だったのでしょうか、夜中に樹生が何度も起きて「おっぱいをくれ！」と私の方に向かってくるのです。お陰で十分睡眠がとれず、「早く日本にかえりたいな〜。」とってしまいました。幸い翌日には熱が下がったのですが、こんな状況を考えるとプーケットに行かないで正解だったかもしれません。（美澄）

【後日談】帰国の日程を5月23日カトマンズ出発で帰路名古屋から入国して岐阜の実家に立ち寄る日程を組んだら、国内での帰路立ち寄りが本部で認められなかった。日程再調整を余儀なくされた私達は岐阜を諦め、代わりにプーケット3泊を加え、5月27日成田到着の日程を組んだのだった。神様はいつでもフェア！（浩司）

歯痛には銅線が効きます。

ほんまかいな、不思議の国ネパール

4月に熱を出した後、昨年9月に日本を出発する前に治療した歯が痛みだしました。熱い物も冷たい物も滲みるし、段々とひどくなってきたので、歯医者に予約を入れると10日後しか予約を取れませんでした。困っていると、シータが手に銅線（電気コードの中にある細いもの）を持ってやって来て、「これを耳に着けてみて。」と言うのです。一瞬「えっ？」と思いましたが、溺れる者は藁をも掴むで試してみることにしました。痛む歯の反対側の耳に銅線を通すということで、私は右の歯が痛んだので左耳のピアスの穴に銅線を着け様子を見ると、翌日には痛みが軽くなっているのです。偶然かどうかわかりませんが、痛みがあまりなくなったのでそれ以来、私はそれを外すことが出来なくなり、歯の治療が終わるまでつけておくことにしました。ネパールでは科学で説明出来ないことがたくさんありますが、これもその1つですね。

シータに誰に教えてもらったのか聞くと、祈禱が出来るおじさんから、ということでした。その他にも歯痛を治す方法はあられるらしいですが、本当に不思議なことが多いです。（美澄）

ナニーの名付け親になる。

ネパールへの置き土産

KC夫妻の赤ちゃんも順調に育って、間もなく満4ヶ月となる。大した病気もせずとても元気な赤ちゃんである。ネパールでは女の子の場合は5ヶ月の誕生日のお食い初めの儀式まで赤ちゃんの命名はせず（男の子の場合は6ヶ月）、皆この子のことを「ナニー」と呼んでいる。今回、5ヶ月の誕生日を前にネパールを去るに当たり、KCより、ナニーの名前を付けて欲しいと頼まれた。どうせ正式な命名は別途するのだろうと思っていたら、彼等は私達の考えた名前を正式な名前とするつもりらしい。「のぞみ」「ひかり」等いろいろ候補はあったが、ネパール人に発音しやすい名前といたらなかなか適当なものもなく、さんざん迷った挙げ句「笑子（エミコ）」に落ち着いた。笑顔に恵まれて幸せに美しく育ちますようにという願いを込めた名前だ。ネパールでは乳幼児死亡率が極めて高く、KC夫妻にとっても「エミコ」は4度目の正直、樹生のバヒニ（妹）として、大きくなって再会できることを、心から願ってやまない。（浩司）

わかったことは、 わからないということ

私の仕事紹介 (その25)

サンチャイ通信「私の仕事紹介」では、これまで僕がその月々でやったことや仕事の上で思ったことを独断と偏見を持って書きつづってきたコーナーで、半ば愚痴に近いコメントもあって賛否両論持たれた方が多かったかと思う。任地最後の「私の仕事紹介」はこの2年7ヶ月を振り返って感じたことを述べたいと思う。

仕事に関して言うと、やったこととやれなかったことを比べたら、後者の方が圧倒的に多かった。特に、ラスト数カ月の自分を振り返ると、次から次へと新しいアイデアが生まれて来たのに、残り時間が足りなくて結局実現させられなかったものがかなり多い。

また、よしんば自分自身で仕込んだ案件について、立ち上がった後のフォローができないのが残念で仕方がない。「チサバニ村落開発・住民防災計画」は、JICA全体で見ても歴史的イベント、それを立ち上げに漕ぎ着けて、いちおうの事業の枠組みは作った。しかし、大変なのはこれからで、また面白くなるのもこれからだろうと思う。事務所で仕事をする身としては、任期2年7ヶ月は短いというのが実感である。

業務の面で先立つのは反省ばかり。自分の能力不足が悔やまれる。僕の3大後悔といったら・・・

(1) BPEP (基礎初等教育プロジェクト) のような、7つの援助機関による連携協力によるメガプロジェクトで、自分の英語力の至らなさから、膨大な関連文書を読みこなせず、JICA及び日本の立場というものを主張して、BPEPの枠組み形成に積極的に関与することができなかった。

(2) 「村落振興・森林保全計画/緑の推進協力計画」のような、地方開発・貧困対策案件を担当しながら、地方を見る機会を十分作れず、ネパール語の勉強も中途半端で、村落住民と直接話す中で、JICAの技術協力が住民に与えた、目に見えないインパクトを十分に見て取ることができなかった。

(3) 人造りの観点から、専門家や隊員が行っている貴重な技術協力の現場を十分に見ることができず、ネパールの人々や日本の皆様、さらには他の援助機関関係者等に、自分の言葉で説明して十分な広報に努め、JICA事業のサポーターを増やすことができなかった。

結局、英語できない、ネパール語できない、現場に行っていない、事業を知らないのなないないづくしだった。そんなにおさばりしていた訳でもないのに、振り返ってみたら何もやってないような気がする。それが海外勤務というものかもしれない。

唯一の救いといったら、ソウラブジーを4ヶ月という短期間でかなりの戦力に育て上げることができたということくらい。昨秋、長所員と内田所員が相次いで帰任した後、僕の業務量は一挙に増えた。だから、ソウラブジーをとに

かく使わざるを得ず、かなり濃密なOJTを施すことができた。その結果、4月後半から彼を連れてチサバニ、カスキ・バルバットと立て続けに出張に行った際は、彼は積極的に村人の中に入って行って、目に見えにくい真実、真の問題点を探ろうと努力をするまでになった。

5年以上続くことも多いJICAプロジェクトなのに、日本人所員の任期はせいぜい3年。しかし、ネパール人スタッフは退職しなければ働き続ける。それを考えれば、私達の仕事は、どれだけネパール人スタッフが自発的に気持ちよく仕事ができる環境を作ってあげられるかだと思う。ネパールのことをいちばんよく知っているのはネパール人なのだから。

帰国後、僕は新宿のJICA本部の派遣事業部への配属が決まっている。おそらくネパールへ派遣される技術協力専門家のお世話をする仕事も任されるだろう。ネパールとの関わりは今後も続くと思うし、そのためには今の自分の能力不足を真摯に受けとめて、最大限の改善努力はする必要があるだろう。もっとネパールのことを知りたいと思う。

最後に、ネパールでの在任期間中、大きな病気を患うこともなく、無事に職務を全うできたのは、ひとえに家族、そして我が家のスタッフの支えがあったればこそだと思う。美澄にとっても異国での妊娠と樹生の子育ては大変なハンデだったことと思うが、KC夫妻を始めとする多くのネパール人の思いやりに助けられ、なんとか無事にやってこれた。そして、美澄や樹生が元気でいてくれたことが、どれだけ私自身の励みになったことか・・・辛かった時も悲しかった時も、2人の笑顔がどれだけ救いになったことだろう。ここで改めて美澄、樹生、そしてKC、シータ、クリシュナ、ナヌさん、一時ナヌさんの指導に来て下さったナラヤニさん他、我が家を盛り立てて下さった多くの方々にお礼申し上げたい。(浩司)

タライの巨星落つ

タライ平野のダヌーシャ郡に住むビルナラヤン・チョーダリ氏は、公称141歳で世界最長老と言われているが、ネパール国民、そして家族の切望にも関わらず、この国には戸籍制度がなく年齢もカネで買えるということでギネスブックでは認められてこなかった。ビルナラヤンさんは、数年前に由緒あるゴルカ・ダクシン勲章をピレンドラ国王から授与され、「150歳まで生きる。」と意欲を見せていた。

しかし、残念なことに、ビルナラヤンさんは、4月20日、朝食をとった後ちょっと疲れたと言って眠りに落ち、二度と目を覚ますことはなかったそう。

平均寿命が60歳に満たないこの国で、140年も生きる人がいるというのは脅威的なことだ。因に現在の最長老はカトマンズ盆地に住む121歳の女性だとか。ビルナラヤンさんの御冥福をお祈りします。

昨年夏、休暇一時帰国から戻った私が単身赴任生活の暇つぶしに書店を物色していて、「愛 LOVE NEPAL」という日本語の雑誌を発見した。この雑誌、ネパールで販売されている英字新聞や週刊誌から面白そうなネタを拾い読みし、日本語に直してさらに解説まで付けて、ネパール在留邦人並びに日本全国のネパール人の方々向けに情報発信するユニークな雑誌だった（断っておくが、この雑誌からネタを拝借して「サンチャイ通信」に掲載したことは一度もない。たまたま記事が重複したケースは2度ほどあった）。当初は月2回発行していたが、1997年暮れ頃から発刊スケジュールが遅れがちになり、月1回発行となった。さらに、この月刊スケジュールも、以前は毎月10日頃には発刊されていたものが徐々に遅れ始め、とうとう4月号は4月中旬に発刊されず、5月中旬に至るまで発刊されていない。一体何が起きているんだろう？

この雑誌、ネパール人と結婚した日本人女性が暇に任せて(?)編集を始めたもので、大学で英語専攻だった私の目から見ると翻訳が甘いと思われる箇所が多かったし、誤植がやたらと目立ち、公共の書店ルートでカネを取って販売するのならもうちょっと責任を持った編集、責任を持った校正をやって欲しいと思っていたが、これは所詮重箱の隅をつつく議論。実際、着眼点は良かったと思うし、記事のまとめ方は面白かった。1ヶ月分の新聞記事をダイジェストで掲載するページはJICA事務所で働く自分にとっても非常に助かった。20代後半のネパール人男性が「文通希望」とかってんでサングラスかけて真顔(コワ〜イ)で写真写っているペンパル紹介コーナーは笑えた。一体誰がペンパルになるんだろうって・・・

しかし、1月号頃からだんの新聞記事ダイジェストがえらく細かくなったので、正直言ってこれはやばいと危惧した。零細経営の編集部だし、日本人が2名しか関与していないから、これだけの編集をやろうと思うと日本人編集員の負担が重くなる。それでも1、2回は緊張感があっていいだろうが、これがマンネリ化してくると作業の能率が極めて悪くなる。ましてや、この編集員が日本に里帰りでもしようものなら・・・

詳しいことはよくわからないが、日本に帰っても購読したいと思っていた雑誌だけに、中途半端な休刊は是非とも避けて欲しい。「サンチャイ通信」は今月が最後だが、頑張れ「愛 LOVE NEPAL」!! (浩司)

ヒルの散歩道

雨季のトレッキングは要注意

今年は雨季入りが早いのではないかと考えていたら、4月末に出かけたカスキ、パルバット郡出張でしっかりジュガ(山ヒル)にやられた。ポカラ近郊のフェワ湖上流のパンチャッセ山(2509m)周辺は、ネパール随一の多雨地帯、パンチャッセに雨雲がかかるために、ポカラはこの時期午後になると必ず雨が降る。

今回の出張は、パルバット郡のクスマから、「村落振興・森林保全計画/緑の推進協力計画」のタバタナ、トゥリポカリサイトの事業実施状況を視察し、トゥリポカリからパンチャッセ南尾根のバンジャン峠を抜けてカスキ郡のチャバコットサイトを視察する2泊3日行程だったが、バンジャンを越えた辺りから降り始めた雨が雷雨に変わり、私達は2日目の宿泊予定地ムクンプルに到着できず、シダネという集落の民家の軒先で一晩を明かすことになった。

その日は気付かなかったが、履いていたソックスを翌朝見ると、白いソックスに3ヶ所血が滲んだ箇所があった。気付かぬうちにヒルにやられたなと思ったら、その日のシダネからムクンプルはもっとひどく、そこら中でヒルがおいでおいでしている。落ち葉でも踏もうものなら靴のソールに2~3匹は必ず付いてくる。立ち止まって払い落とそうとすると、二酸化炭素に誘われてさらにヒルが集まってくるという悪循環。ムクンプルを抜けてようやく乾燥した場所にたどり着いて靴を脱いでみると、靴の中には既に3匹侵入してきていた。これまで1~2匹のヒルを見かけたことはあったが、こんなヒルだらけの場所は初めてだ。この時期に山間地に出張に出る機会が殆どなく、私がヒルに献血したのはこれが初めてである。

ヒルは海拔1,000~2,000mの中山間地に生息している。6月頃にならないと現れないと言われているが、さすがにパンチャッセ周辺は多雨地帯、生活歩道は既にヒルの散歩道と化している。チャバコットの清水隊員は、「血を吸い終わったヒルが落ちやすいように」とチャッパル(サンダル)履きでいつも生活しているそうだ。さすが協力隊員は逞しい。

ヒルがいない季節ならパンチャッセ周辺の集落はポカラから訪れるには丁度いい場所だと思うんだけど・・・ (浩司)

編集後記

◆1996年3月より編集開始した「サンチャイ通信」も今月を持って発行を終了させていただきます。第30号が目安とっておりましたので、ちょっと早い任期満了でした。今思うと、書ききれなかったことが随分とあり、お伝えしなかったことが必ずしもお伝えできたわけではありませんが、まかりなりにも26回の発行を行うことができましたことは、ひとえに皆様方のお陰だと思っております。これまでのご愛顧、大変に有り難うございました。日本に帰りましたら、またいろいろご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願いいたします。(浩司)

◆遂に「サンチャイ通信」最終号となりました。ネパール生活での生活は、最初は様子がわからず戸惑うことも多かったのですが、ネパール語を習い初めてから少しずつ世界が広がったように思います。特にKC夫妻とコミュニケーションがとれるようになってからはネパールの習慣を教えてもらい、そのつど面白いなと思いつつ「サンチャイ通信」に書いてきました。そしてこのネパールで子供も授かり、色々な意味でこの国は私達にとって忘れがたい国です。数年、数十年後のネパールがどうなっているか、また来てみたいと思います。

最後に、私達が無事にネパール生活を送れたのも周囲の人々に支えられたからこそです。心よりお礼申し上げます。日本に戻りましたら、また皆様にもまたお世話になります。これからも宜しくお願い申し上げます。ナマステ! (美澄)